

神隠しに遭った時計屋の息子を探す人々の叫び声と、手にした金物をガンガンと鳴らす音とに挟まれて、葉一郎はごくひっそりと生まれた。そのかすかな産声は誰の耳にも届かず、次の間では、もの言わぬ三女のかよが、ぐにやりと曲がつた腰をそのままに天井を眺めていた。隣町から来た産婆は着替えを終えると、御子は鬼の子の出来損ないだと漏らして帰っていき、母のヨシは呆気にとられてわが子とわが身のこれからを思った。そうして夫の乱暴な足音が聞こえるとヨシは折れた枝のようにうな垂れた。夫の重一はどつかと座り込むと虚空を睨み、なんも泣かなかったんだなと言だけいい、その視線はただの一度も母子を捉えることはなく、三月たった後にヨシは肺炎で死んだ。夫婦には娘が二人いた。叔父は婿をとることを勧めていたが、しかし重一は、自らの子でなくてはならぬと跳ね付けて、上の娘は遠方にやってしまった。それで今度こそと男を望んだ末の葉一郎の不具であった。

ヨシのつましい弔いのあいだ、祖母の腕に抱かれた葉一郎はヒューヒューと喉を空気が通る音は出すものの、その音は遠くなつた祖母の耳に届かず、それから、かよと祖母と三人、わずかの金とともに狭い離れに押し込められた。重一は鳶の醜く這つたその離れを見たくないかのように家に寄り付かず、今に見てろ今に見てろと呟きながらひたすらに働いて、小金が入れば近くの寂れた神社の鳥居を塗りなおし、時には灯籠を取り寄せ、まわりの誉めそやす声を聞いてそれで満足であった。ひとびとはそんな重一の満足げな顔に、妻に先立たれた悲哀を見るのだが、そんなことは露知らず重一は、だらだらと長い石段を登っては甲斐甲斐しく箒など手にして、地元の校長をやっている神主に感謝され、そして疎んじられた。重一はときに興業師をやり校庭に土俵をこしらえ、ときにはいぐさの歩き売りを従えたりと、あちらこちらとふらふらし、そのどれでも中々の手腕を見せたが大成はしなかった。

産声からしてまともに出せない葉一郎である。それを哀れんだ祖母は、毎日葉一郎の喉をさすっては話しかけ、それに応えて葉一郎は言葉をゆつくりと覚えていったが、やはりかすれたような声が出るのみで、祖母はそれが言葉であるとはわからず、人に聞かれても、いんやだめだと苦りきった。当然かよも言葉を解さなかった。それで葉一郎は自分の言葉

は通じないものだとして決めてしまい、次第しだいかすれた声すらも出さなくなった。そしてその分、往来の人の声、庭に来るセキレイやそこらをうろつく野良犬など、鳥や獣の鳴く声に敏くなったが、他種と意思を通ずるはずもなく、やはり祖母の袖をぐいぐい引つ張っては話をねだり、飽いて時に意味の通じぬ言葉を並べる祖母に嫌気が差した三歳の時分には、何処かから貰ってきた本をいつまでも眺めていた。他の子は地べたを跳ね回る齡なので、はや噂を聞きつけた隣人たちに祖母は、なんもわかってねえ模様を眺めてるみたいなもんだと言ったが、縁側に寝そべる葉一郎の目元などは、はっとするほど凛々しく意志があった。そのときかよは六歳で、未だに床についてもがくばかりである。しかし体は少しづつ膨らんでいくので、乱れた布団から足がはみだすのを、祖母は情けない顔をして戻してやるのであった。葉一郎は誰に言われるでもなく、縁側とかよの枕元とを自らの場所と定め、飽かずにかよの目を見詰めては白く滑らかな顔をさすったが、かよは時折笑ったように顔を歪めるのみであった。葉一郎は暖かいときは縁側にねそべり本を広げ、雨や寒風の吹く日には、かよの枕元で広げた本にしんみりと燈火が落ちた。葉一郎をはじめ、かよは眠っているだけだと思っており、実際祖母もそう言い聞かせていたのだが、さすがに葉一郎も、少年にもならない齡とはいえ、かよが何か自分とは違う仕組みで生きているのだと悟り、かよが永くは生きられないという大人の言葉も耳にも入ってきた。大人たちはそういうとき一様に不憫そうな顔をして見せるのだが、葉一郎はかよが不憫だとは少しも思わなかった。ただ、甘い餅を食べぬのが可哀相だなと、そう思った。

(続く)